## 142 エルサレムに向かう最後の旅

ルカによる福音書 17：11～37、マタイ 24：23～28、37～41

**▶重い皮膚病を患っている十人の人をいやす（ルカによる福音書 17：11～19）**

11 イエスはエルサレム（→ユダヤの首都で宗教の中心地）へ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。
→（NIV）Now on his way to Jerusalem, Jesus traveled along the border between Samaria and Galilee.
→(NKJV) Now it happened as He went to Jerusalem that He passed through the midst of Samaria and Galilee.
→（リビング・バイブル）一行はエルサレムを目指して進み、途中サマリヤとガリラヤの境を通りました。
→イエスは、エフライムにいたので、エルサレムへは南下すればよかったが、何らかの理由で、一旦、北へ向かい、そしてサマリアとガリラヤの間を通り、エルサレムを目指したと思われる。

12 ある村に入ると、重い皮膚病（新改訳：ツァラアト→適当な日本語がないので、ヘブライ語をそのまま表記）を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま（→レビ記 13：45）、13 声を張り上げて、
「**イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください**」と言った。
→重い皮膚病は、多種多様の皮膚病の総称で、ハンセン病ではない。当時 1 世紀頃のユダヤには、ハンセン病はなかった。
ハンセン病は、現代では治療法が確立され完治する病気ですが、ハンセン病患者の外見や感染に対する恐れから、患者たちは何世紀にもわたり社会的烙印、否定的な評価（スティグマ）を受け、差別されてきた。また、数多くの古文書に残っている記述からも、有史以来、天刑、業病（悪業の報いで罹ると考えられていた難病）、呪いなどとされていることが理解できる。
→一人の重い皮膚病を患っている人のいやし（ルカ 5：12～16、マタイ 9：1～8、マルコ 1：40～45）

14 イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、
「**祭司たちのところに行って、体を見せなさい**」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。
→重い皮膚病の人は、祭司に病気が治ったかどうかを確認してもらう必要があった（レビ記 13 章）。

15 その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。
16 そして、イエス（→ユダヤ人）の足もとにひれ伏して（→平伏して）感謝した（→礼拝の姿勢）。この人は（ユダヤ人から軽蔑されていた）サマリア人だった。
→当時、ユダヤ人はサマリア人とは交際してしていなかった（人種的な壁）が、同病だったので同じ行動をしていた（同病相憐れむ）。
→同病相憐れむ：同じ病気で苦しむ者同士は、互いに思いやる心を起こす。転じて、似たような境遇にいる者同士は、互いに同情し合うようになる。

17 そこで、イエスは言われた。
「**清くされたのは十人**（→9 人のユダヤ人と一人のサマリア人）**ではなかったか。ほかの九人**（のユダヤ人たち）**はどこにいるのか。18 この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。**」

19 それから、イエスはその人に言われた。
「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」
→このサマリア人は、肉体的な癒しだけではなく、霊的救いを得た。

▶神の国が来る（ルカによる福音書 17：20～37、マタイ 24：23～28、37～41）
20 ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。
「神の国は、見える形では来ない。21『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間（→あなたがたの心）にあるのだ。」
→（リビング・バイブル）ある日、パリサイ人たちがイエスに尋ねました。「神の国はいったい、いつ来るのですか。」イエスは答えて言われました。「神の国は、目に見える形では来ません。『ここに来た』とか、『あそこに来た』とか言えるものではないのです。はっきり言いましょう。神の国は、あなたがたの中にあるのです。」
→神の国は形として見える物質のようなものではなく、霊的なものである。

22 それから、イエスは弟子たちに言われた。
「あなたがたが、人の子の日（→再臨の日）を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。
→（リビング・バイブル）そのあとで、イエスは神の国についてもう一度、弟子たちにお話しになりました。「まもなく、一日でいいから、わたしといっしょにいたいと願っても、もういっしょにいられない日が来ます。

23『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。
→（リビング・バイブル）その時にはまた、『主が帰って来られた。ここにおられるぞ』とか、『いや、あそこだ』というふうに、情報が乱れ飛ぶでしょう。そんなうわさを信じたり、彼らの扇動に乗ってあとを追いかけたりしてはいけません。

24 稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。
→（リビング・バイブル）わたしが帰って来る時には、はっきりわかるからです。ちょうど、いなずまが空の端から端までひらめき渡るように、一目瞭然なのです。

25 しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。
→（リビング・バイブル）しかしその前に、わたしはひどい苦しみを受け、この国の人々全部から、つまはじきにされなければなりません。

26 ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。
→（リビング・バイブル）わたしが帰って来る時、人々は、かつてのノアの時代のように、神のことなどにはまるで無関心でしょう。
→神は善良で信仰深いノアを選んで、彼の家族と他の生き物を洪水から救う大きな船（箱舟）を造らせた（創世記 6～9 章）。

27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。
→（リビング・バイブル）ノアが箱舟に入り、洪水が押し寄せ、何もかも滅ぼし尽くすまで、人々は飲んだり、食べたり、結婚したり、いつもと変わらない生活をしていました（創世 6 章）。

28 ロト（→アブラハムの甥）の時代にも同じようなことが起こった（→悪が満ち、罪深い人たちが住むソドムの滅亡に遭遇したが、神はロトとその家族を救った[創世記 18：16～19、29]。）。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。

30 人の子が現れる日にも、同じことが起こる。
→（リビング・バイブル）わたしが再び来る時も同じです。その瞬間まで、すべてがいつものとおりなのです。

※大苦難（患難）時代の直前まで、人々は普段通りの生活をする（26～30 節）

31 その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。32 ロトの妻のことを思い出しなさい。
→ロトの妻は神から振り返ってはいけないと言われていたにも関わらず、振り返って神がソドムを滅ぼすのを見てしまった。こうして、神に背いたため、塩の柱にされた（創世記 19：26）。

33 自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。
→（リビング・バイブル）だれでも、いのちにしがみつく者はそれを失い、いのちを捨てる者がかえってそれを自分のものにできるのです。

34 言っておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。
→（リビング・バイブル）よく言っておきます。その夜二人の男が一つの部屋に寝ていると、一人は天に上げられ、一人は残されます。
→連れて行かれる人は、天に引き上げられ、残される人は世の終わりの苦難を受ける。

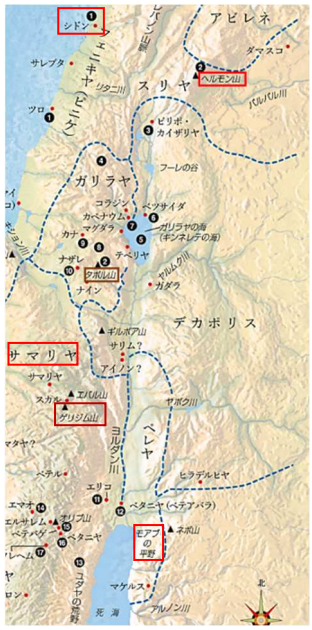
35 二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」
36<底本に節が欠けている個所の異本による訳文>
畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。†
→（リビング・バイブル）家事をしている二人の女のうち、一人は天に上げられ、一人は残されます。また、畑でいっしょに働いている二人の男も同様です。

※大苦難（患難）時代が来ると、直ぐに行動を起こし、後ろを振り返ってはならない（31～35 節）。

37 そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。
イエスは言われた。「（イスラエルの民の）死体のある所には、はげ鷹（→異邦人の軍勢）も（エドムの主要都市、ボツラに）集まるものだ。」
→ボツラは、現在のヨルダンにある遺跡「ペトラ」（ギリシア語で「岩」という意味）である。

| | タイトル(書名) | 章:節　聖句　〔検索対象総数：4 / 聖句等の総数 33250 〈ボツラ〉4個 〕　聖書Navi Active 393128091（新共同訳）〔検索語彙：ボツラ〕 |
|---|---|---|
| K | イザヤ書 | 34:6 まことに、主の剣は血にまみれ／脂肪を滴らす。小羊と雄山羊の血にまみれ／雄羊の腎臓の脂肪を滴らす。主がボツラでいけにえを屠り／エドムの地で大いなる殺戮をなさるからだ。 |
| K | エレミヤ書 | 49:13 わたしは自分自身にかけて誓う、と主は言われる。ボツラは、廃虚となり、恐怖、恥辱、ののしりの的となる。その町々は皆、とこしえの廃虚となる。」 |
| K | エレミヤ書 | 49:22 見よ、敵は鷲のように舞い上がり、速く飛んで来て、ボツラに向かって翼を広げる。その日には、エドムの勇士の心は、子を産む女の心のようにおののく。 |
| K | アモス書 | 1:12 わたしはテマンに火を放つ。火はボツラの城郭をなめ尽くす。 |

**【参考】サマリア**




▶サマリア（Samaria）は、パレスチナ中央部の地域名で、北にガリラヤ、南にユダヤが接する。「列王記」によると、サマリアという名前は昔この辺の土地を持っていた地主「シェメル／セメル Shemer」の名前が起源とされる。
→列王記上 16：23～24　ユダ（南王国）の王アサの治世（BC911～870／913～873）第三十一年に、オムリが（北）イスラエルの王（BC885～874／876～869）となり、十二年間王位にあった。彼は六年間ティルツァで国を治めた後、シェメルからサマリアの山を銀二キカル（約 34 kg／キカル×２＝約 68 kg、Ag80 円／g×68 kg≒544 万円）で買い取り、その山に町を築いた。彼はその築いた町の名を、山の所有者であったシェメルの名にちなんでサマリアと名付けた。
→オムリ：列王記に記されている以上に実際には王として成功を収めた（列王記 16：21～27）。【モアブ】を支配し、息子の婚姻を通して【シドン】と同名を結び（16：31）、サマリアを築いて首都とした。しかし、この卓越した政治力も信仰の面では発揮されなかった（16：25～26、ミカ書 6：16）。
その後この辺り周辺が北イスラエル王国の首都となったため、都市に限らずにこのあたりの地域やもっと広く北イスラエル王国そのものを指すようになった。

▶BC722 年、北イスラエル王国は、アッシリアに滅ぼされ属領（住民を奴隷として連れ去りーアッシリア捕囚、代りにメソポタミア北部ーチグリス川とユーフラテス川の上流域ーのアッシリア人、アラム人を移住させた）となる。この移住してきた異民族と混血したのがサマリア人で、以後長く異教徒としてユダヤ人に排斥された。
サマリア人は【ゲリジム山】（モーセによって祝福の象徴とされ、サマリア人の聖地、申命記 11：29、27：12、ヨシュア記 8：33、士師記 9：7）に神殿を持っていて（聖書に記述はない）、祭司もおり、また、独自の解釈をしていたので、ユダヤ人はサマリア人をイスラエルの神に忠実でないと考えていた。

❶サマリア人はユダヤ教と偶像礼拝が混合した宗教を受け入れた。
→列王記下 17：26～28
彼らはアッシリアの王にこう告げた。「あなたがサマリアの町々に移り住ませた諸国の民は、この地の神の掟を知りません。彼らがこの地の神の掟を知らないので、神は彼らの中に獅子を送り込み、獅子は彼らを殺しています。」アッシリアの王は命じた。「お前たちが連れ去った祭司の一人をそこに行かせよ。その祭司がそこに行って住み、その地の神の掟を教えさせよ。」こうして、サマリアから連れ去られた祭司が一人戻って来てベテルに住み、どのように主を畏れ敬わなければならないかを教えた。
❷サマリア人の信仰は、①神が唯一の神である、②モーセが唯一の預言者である、③モーセ五書だけが唯一不変の啓示である、④ゲリジム山が唯一の聖所である、⑤ 天地創造から 6000 年後、ゲリジム山の神殿とサマリア人の繁栄を回復するタヘ(回復者)が現れて新しい統治を始める、に要約される。

▶ユダヤ人とサマリア人との間にある教理や礼拝を巡る対立
①かつてサマリア人は、エルサレムに神殿を再建することに参加したい（エズラ記 4：1）と望み、願い出たが、周辺異教文化の人々との結婚やユダヤ人にとって正当的でない見解の故に、その機会を与えられなかった（結果として、サマリア人は自分たちの神殿をゲリジム山に建てた）。そして、ネヘミヤがエルサレムの城壁を建てるのに専念していた時、サマリア人は、それを阻止しようと激しく邪魔をした（ネヘミヤ 6：1～14）。
②サマリア人は自分たちの神殿をゲリジム山に建て、モーセが特別に国として礼拝する場所として示したのはそこだと主張し、サマリア人の偶像礼拝の宗教はこうして永続された。
③サマリア人はモーセの五書だけを受け入れ、他の預言者の書、ユダヤ人の伝統を拒絶した。

以上の理由から、彼らの間には全く和解できない違いが起こり、ユダヤ人はサマリア人を人類の中で最悪の人種だとみなし（ヨハネによる福音書 8：48)、彼らとは全く付き合いをしなかった（ヨハネによる福音書 4：9)。
ユダヤ人とサマリア人の間の憎しみにもかかわらず、サマリア人に平和の福音を宣べ伝えて（ヨハネ 4：6～26)、イエスはその間の壁を壊されました。そして、イエスの後に来る使徒たちもイエスの模範に従いました（使徒言行録 8：25)。

▶聖霊によって私たちの目に天来の油が塗られるとき、
❶他の人には困難しか見えない場所に可能性が見え、
❷他の人には不毛な畑にしか見えない場所に、私たちは神の国のための豊かな魂の収穫を見るのである。
→福音を受け入れようとする心に私たちが種を蒔くなら、それはいつの日か、神の栄光のために実を結ぶことになる。

【参考】新約聖書にある「サマリア人」（旧約聖書では、列王記下 17:29 のみにサマリア人が登場する）

| | タイトル(書名) | 章:節　聖句　〔検索対象総数：8 / 聖句等の総数 33250 〈サマリア人〉8個 〕 聖書Navi Active 393128091 （新共同訳） ［検索語彙：サマリア人］ |
|---|---|---|
| S | マタイによる福音書 | 10:5 イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。 →イエスの時代、ユダヤ人の中には、決して異邦人と付き合うべきではないと信じている者やサマリア人を嫌悪する者もいた。 |
| S | ルカによる福音書 | 9:52 そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。 |
| S | ルカによる福音書 | 10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、 |
| S | ルカによる福音書 | 17:16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。 |
| S | ヨハネによる福音書 | 4:9 すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。 |
| S | ヨハネによる福音書 | 4:39 さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。 |
| S | ヨハネによる福音書 | 4:40 そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。 |
| S | ヨハネによる福音書 | 8:48 ユダヤ人たちが、「あなたはサマリア人で悪霊に取りつかれていると、我々が言うのも当然ではないか」と言い返すと、 |

【参考】種

| | タイトル(書名) | 章:節　聖句　〔検索対象総数：3 / 聖句等の総数 33250 〈種〉4個 〕 聖書Navi Active 393128091 （新共同訳） ［検索語彙：種］ |
|---|---|---|
| S | マルコによる福音書 | 4:14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。 |
| S | ルカによる福音書 | 8:11 「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。 |
| S | ペトロの手紙Ⅰ | 1:23 あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです。 |

NO COPY H.Taniguchi